

一 冊 の 本

上 西 啓 祐

旧版岩波全書に東北帝大教授松隈健彦著「宇宙」というのがある。全書の発行番号は90番で昭和13年12月第1刷が発行された。筆者が所持しているのは昭和16年5月発行のもので、すでに第3刷であったから、当時としては非常に売行きの良い本であったに違いない。それは「宇宙とは如何なるものか」という命題が古人人類の最高の文化的関心事であったことにもよるが、本書がこの問題についての如何に優れた解説書であったかを雄弁に物語るものであろう。しかし、その後間もなく対米英戦が始まり、物資の窮乏がひどくなったので、さらに版を重ね得たかどうかはよく分らない。

筆者がこの本を入手したのは、たしか(旧制)高校生の時であったと思うがどうもその動機はあまりはっきりしない。戦時下の仙台の夜空は暗く天の川が冴え低い星までよく見えた。中学生時代から星の美しさと天体の神秘に魅せられていた筆者は天文の啓蒙書によく読み耽り宏大な宇宙に想いを馳せるのを好んでいたが、高校生ともなったからにはもっとアカデミックな本も読まねばと思ってこの本を購入したものらしい。本書のはしがきにある「……天文学研究の最後の目標は宇宙の構造、其の進化を研究するにある。否独り天文学のみと言はず自然科学全体として其の研究の最後のゴールは“宇宙”の実体を明かにする事にあると思う」というくだりに、我が意を得たりと、えらく感動したのをおぼろげながら憶えている。その後、寮の殺風景な部屋で空腹を抱えながら分るところだけを拾い読みしていた時代のことが思い出される。ともあれ、この同じ仙台の空に“松隈健彦先生”という巨星が燦然と輝いているという多分に畏れを伴った敬慕の念がこの本によってひそかに心理の深層に播種され、それが後年先生の門を叩かしめる遠因になっていたとするならば、この本は筆者個人にとってやはり「因縁の書」というべきものであろう。

ところで、本書はわずか160頁の小冊子ではあるが、宇宙に関する当時の最新最高の知識の骨組を力強い筆致で簡潔に要領よくしかも平易にまとめ上げてあり、いま読み返してみてもなかなか面白く、依然として“古典”としての高い香りを失ってはいない。まず、宇宙の構成要素として最も重要である恒星に付属する物理量について、その測定法まで説明しての懇切な解説(第1章)があり、つづいてそれらの運動(第2章)に論及し、第3章に入って恒星視差測定の間接的諸方法について丁寧に

説明し、恒星の空間分布に関する諸家の論説を紹介している。しかしハーシェル以来百余年の努力は実は銀河系の一部である局部恒星系の構造を研究していたにすぎないことをのべて第4章大銀河系に筆を進めている。シャープレイが銀河系の姿についてほぼ正しい認識に到達できたのは、主として球状星団の分布と銀河系の回転の研究を通してであったので、当然これら二つの問題がこの章の主題になっているが、その中に球状星団における恒星の密度分布についての著者自身の研究結果ももりばめている。このようにして、大銀河系は壮大な規模をもつことが分ったが、これとて窮極の宇宙ではなく、銀河系外星雲の世界こそが宇宙である(第5章)という当時の新宇宙観の紹介に著者の心血が注がれており、今なお読者を魅了してやまない力をもっている。(勿論、第3章でのベータケフェウス型変光星による距離測定が星の種族によるパーゼの尺度改訂以前のものであったから、アンドロメダ星雲の距離が68万光年となり、現在の値190万光年にくらべてかなり小さく、したがって、ハッブル半径も18億光年と現在の推定値130億光年よりずいぶん小さなものになっているのはやむを得ない。)この章は一面では、ウィルソン山の100インチ反射望遠鏡によるハッブルの宇宙探検のドキュメントの観を呈しているが、著者は決してハッブルの意見に盲従しているわけではなく、例えば星雲の平均質量としてハッブルは $10^6 M_{\odot}$ を採用しているが、著者はオールドと共に $10^{11} M_{\odot}$ を採用している。そして現在ではむしろ後者の方がより適切であると考えられている。また、この章で著者は、この壮大なる宇宙観は仏教における三千世界の観念と似通った処があるとのべている。つまり太陽系が小千世界、銀河系が中千世界、大宇宙が大千世界というわけである。これは著者の好んで用いられた比喩で「天文学新話」の中でも説かれている。最後の第6章は相対論的宇宙論である。観測知識としては、ハッブルの法則と宇宙の平均密度ぐらいしかなかった当時のことであるから、多分に数学的モデル遊戯に近いことは否めないが、それでもこれらの観測事実からアインシュタイン宇宙とド・ジッター宇宙を排しルメートルの膨張宇宙を採用すべきを主張し、その他の宇宙論は未完成の故を以て割愛している。

さて、この本のはしがきに「本書は東北帝国大学に於て筆者が物理学の学生になしたる講義を取捨加減したるものである」とあるが、松隈先生の宇宙構造論を筆者等

が受講した際には、その冒頭において本書が参考書の筆頭に挙げられた。講義は本書の内容を幾分肉づけしました。その後の研究結果を補足しもっと専門的にしたようなもので、非常に明快で魅力ある名講義であった。したがって、筆者はこの本を耳からも読んだことになり、何時読み返してみても、先生の気合のこもった肉声が耳朶をうつのを覚えるのである。さらに筆者は先生から親しくゼミナールの御指導を受けたばかりでなく、常に御自宅で囲碁のお相手をつとめ、あるいは各地の名所めぐりのお伴をさせて頂き、その折り折りに宇宙についての御高説を承った。その後筆者は、先生の愛弟子である小貫教授の下で働くことになり熊本に赴任したが、最初の帰省のとき車中にもなったのもこの本であった。当時は食堂車も寝台車もなく車内は混雑し、荷物は食糧でふくれあがっていたので、あまり嵩ばらないで丈夫な本というわけで、固いケース入りの小冊子であるこの本を選んだものらしい。そのとき先生はすでに病床にあり、「君が来たのに碁を打てなくて残念だ」などと冗談をとばされていたが、筆者がこの本を抱きながら熊本に帰る車中にあるとき、先生は仙台の病院で天に昇られたのである。今ではこの本はむしろ思い出深い恩師の形見のようなものにさえなっている。

本書の第5章で先生は「米国に於て200インチの大反射望遠鏡が計画され目下完成に近づきつつある。是が完成された暁には吾等は更に驚異すべき幾多の新事実を発見するであろう」と述べられパロマーの200インチに多大の期待を寄せておられたが、今日の宇宙論の観測理論両面における著しい盛況を御覧になったならばどんなにかお喜びのことであろうと思う。本書が世に出てからすでに30余年になる。宇宙論に関する優れた論文や啓蒙書は少くないが、日本語で書かれた専門家にも役立つ本格的な書物がそろそろ現われてもよいのではないかと希望しているのはひとり筆者ばかりではないであろう。

(熊本大学理学部物理学教室)

生駒山太陽観測所の閉鎖

京都大学理学部附属天文台に属する生駒山太陽観測所(奈良県生駒市鬼取町岩ヶ谷)は、昭和16年7月に設置されて以来約30年間、太陽分光写真儀などによる太陽の常時観測を続け、日々の太陽面現象の記録を国際共同観測網のひとつとしてサービスして来ました。

近年、同観測所近辺の住宅観光開発、各種自動車道路の開通、阪神工業地帯からの煤煙などのため、その観測環境はいちじるしく悪化して来ました。このため同観測所は昭和47年3月31日をもって閉鎖されました。同観測所における3万枚におよぶ太陽写真乾板、各種の観測機械などは飛驒天文台(岐阜県古城郡上宝村)に移転保管されることになりました。飛驒天文台において太陽観測機械の近代化をはかり、同観測所における太陽観測を継続発展させる計画であります。(神野光男)

学会だより

借成学術奨励金申請課題募集について

財団法人借成会は、例年の要項にしたがって、学術奨励金の申請課題を募集しており、本年も学会あてに、その推薦依頼がありました。申請希望の方は、6月15日までに、学会庶務理事まで御連絡下さい。なお、募集要項の詳細は学会におたずね下さい。

年会のプログラムと予稿集脱落のお詫

川口市郎氏(京大理)の「プロミネンスタイル」が、事務所の手違いで脱落しました。御迷惑をおかけした川口氏ならびに会員諸氏にお詫いたします。また印刷所の手落から予稿集に一部印刷もれの生じたものがあります。御不便をおかけして申し訳ありません。残念ながら残部がありませんので交換の申入には応じられません、よろしく御了承ください。

1972年4月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	4,	15	6	6,	31	11	6,	63	16	7,	32	21	7,	57	26	—,	—
2	10,	37	7	—,	—	12	—,	—	17	6,	50	22	9,	52	27	6,	36
3	3,	30	8	—,	—	13	7,	78	18	5,	51	23	—,	—	28	6,	39
4	—,	—	9	—,	—	14	5,	54	19	7,	51	24	10,	55	29	6,	29
5	6,	27	10	7,	57	15	—,	—	20	—,	—	25	8,	54	30	3,	8

(相対数月平均値: 77.0)

昭和47年5月20日	編集兼発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	森 本 雅 樹
印刷発行	印刷所	〒112 東京都文京区水道2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 175 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話武蔵野 31局 (0422-31) 1359	振替口座東京 1 3 5 9 5